**りの段**

**〔解説〕**寛延元年(一七四八)八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛(しょうらく)・並木千柳(なみきせんりゅう)の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気の高い作品でした。赤穂浪士の仇討ちを扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられています。元禄十四年（一七○一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色です。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治(えんや)判官、吉良上野介を高師直(もろのお)、大石内蔵助を大星由良助(ゆらのすけ)などと、太平記の世界をとってつけています。

**〔身売りの段　あらすじ〕**塩冶判官の家臣・早野勘平は、殿中刃傷事件の時に主君のもとを離れていたことを悔やんで切腹しようとしますが、恋人お軽に止められ、お軽の実家山崎に来ています。お軽の父・与市兵衛は、お軽を祇園の一文字屋に売って勘平の士官資金を得ますが、山崎に戻る途中で、斧定九郎に金を奪われ殺されてしまいます。猟に出ていた勘平が家に帰ると、祇園町から一文字屋がお軽を迎えに来ていました。舅が一文字屋から借りたという財布の柄が、昨夜の猟の最中に誤って撃った男のものと同じなので、勘平は舅を殺してしまったのかと苦悶します。おかるは別れを惜しんで連れて行かれます。

急ぎける。

所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、品よくしやんと結ひ立てしは、在所に惜しき姿なり。

駕籠を舁かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。

「エエコウツト、確かこの松の木から、一軒、二軒、三軒目。オヽこゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば

「これはマア〳〵遠い処を、ソレ娘煙草盆、お茶あげましや」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主。

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エヽ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬかエ。テ面妖な。ハハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、この中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打つた。がこれの親父が言はるゝには『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晩証文を認め、百両の金子お貸しなされて下され』と涙をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き換への契約。何がその五十両渡すとの。モ喜んで戴き、ほたほた言ふて戻られたはもう四つでもあらうかい。夜道を一人金持つてゐらぬものと留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せき戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「アァコレ。合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。こっちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去の」

と、懐より金取り出だし、跡金の五十両、これで都合百両。

「サア渡す、受取らしやれ」

「お前それでも、親父殿の戻られぬ中は、ノウかる、わが身はやられぬ」

「テぐづぐづと埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつとも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわいの、証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へば、フン、レコづゝ違ふ。」

どうでかうせざ済むまい、と手を取つて引立つる。

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け無体に駕寵へ、押し込み押し込み、舁きあぐる。

門の口。鉄砲に蓑笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り。

「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」

「オヽ勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず。

「どうでも深い訳があろ。母者人、女房ども、様子聞かう」

とおの真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハヽア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。いやも、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、親父の印形あるからは、こちには構はぬ。サ早う奉公人を受取らうかい」

「オヽ婿殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調へて進ぜたいと、言ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親父どのの言はしやるには、ひよつとこなたの気に、女房売つて金調やうと、よもや思ふてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売らう、まさかの時は切取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調へておましたら満更腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極はめに往て、今に房らしやれぬ故親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、親父殿に半金渡し跡金の五十両と引き換へに、娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上と訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるところ、どうせうぞ、勘平殿」

「ハヽ、これはこれは、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがこちにもちつとよい事があれども、ママそれは追つて。ヤコレ親父殿も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とはまた何故に、とは何故に」

「ハテ、いはゞ親なり判がゝり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「アヽこれいのこれ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言ふて済むものかいの、コレ済むかいの。まだその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭に、ヤ、くるくると巻いて懐に入れらるゝ。『ア、そりや危ない、危ない。これに入れて首に掛けさつしやれ』と、俺が着てゐる、かう、かうかう、この単物の縞の切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻られう」

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オヽてや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハツ』と勘平が肝先にひしと堪へ、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞。『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは舅であつたか、ハア、ハツ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ。とは知らずして女房。

「コレこちの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいかい」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「アヽイヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばつかり」

と言ふに文字も図に乗つて、

「ソレお見いなどうどすえ。七度尋ねて人を疑へぢや。親父の在り所も知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともにでんど沙汰。アァママさらりと済んでめでたい、めでたい、アハヽヽヽヽ。ヤコレお袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サ、サアサアお娘、駕籠に乗りや、早う駕籠に乗りやいのう」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、どうでこなさんのみんな世話。取り分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ。『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と、心を痛め堪へ居る。

「オヽ婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であらう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、悲しうもなんともない。わしや勇んで行く。母さん、したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オヽ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てたも、ヤァ」

「アイ」「ヤァ」「アイ」「ヤァヤァヤァ」「アイナア」

「鼻紙、扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。ソレとばついて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

『なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る事ぢや』と、歯を食いしばり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返る。情なくも駕籠舁き上げ、道を

**の段**

**〔解　説〕**宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書いたものの、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

**〔ここまでのあらすじ〕**源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆき、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰ります。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行きます。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよっていました。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとしますが、靡かぬのに腹を立てて、姫を刀で刺してしまいます。

**〈組討の段〉**敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせますが、熊谷が勝負を挑んで呼び止めます。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷きます。熊谷が敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと言うと、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼みます。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、敦盛を逃がそうとしますが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討ち落とします。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶えます。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのでした。

　去る程に、を始めて、一門皆々船に浮かめば乗り後れじと、に打寄れば、も兵船も、遙かにのび給ふ。無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かゝりけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲヽイ〳〵」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せん返させ給ヘ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〳〵」

と呼ばはったり。敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きかざし、朝日に輝くの稲妻かけ寄り、かけ寄せちゃう〳〵〳〵、蝶の羽がへし、駒の足並かっしかっし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〳〵〳〵。群れゐる千鳥村千鳥むら〳〵ぱっと、引汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も果てしあらざれば、

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨てゝ駒を寄せ、馬上ながらむずと組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鐙を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取って押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名誉を顕はし給へ。又に何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

とろに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「ヲヽやさしき志。敵ながらあっぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんことの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ〳〵、

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う〳〵」

といひ捨てゝ立別れんとするところに、後の山より武者所の軍兵。

「ヤア〳〵熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きゃつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、熊谷ははっとばかり、『いかゞはせん』とたり。敦盛卿しとやかに、

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利剣と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様なる御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く気後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「アヽ後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「忰小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きたるさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝで討ち奉らば、嘸や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ごされて」

と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙にくれゐたる。

「アヽ愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招けとはこの事。早首討ってなき後の回向を頼む、さもなくば生害せん」

とすゝめられ、

「アヽ是非なし」

とつっ立上り

「順縁逆縁倶に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。をほどいて敦盛の御死骸を押包み、取って引き結び、手綱を手繰り結ひ付ける。鞍の塩手やしをしをと。に御首携へて、右に轡の哀れげに、のうき別れ、太子を送りたる、童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに（引て行。）

**の段**

**〔解説〕**明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

**〔あらすじ〕**三輪の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求馬(もとめ) 〔実は鎌足の子、淡海〕に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。求馬は、姫の後を追って三笠山の御殿にたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱶七(ふかしち)に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

れてぞ忍ばるゝ

迷ひはぐれしかた鶉、草の靡くを導べにて、いきせきお三輪は走り入り

「エヽこの苧環の糸めが切れくさったばっかりで、道からとんと見失うた。さりながらこゝより外に家はなし。大方この内へ入ったに違ひはない。エヽ誰れぞ来よかし。問ひたや」

と見やる先より、お端女がまぶかに、しゃな〳〵と豆腐箱提げ歩み来る

「申し〳〵」

と呼びかくれば、オット呑み込む早合点

「オヽお清所尋ねるなら、そこをこちらへかう廻って、そっちゃの方をあちらへ取り、あちらの方をそちらへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに脇目もふらずめったやたらにずゝゝゝゝっと行きや」

「イエ〳〵私が尋ねるのは、そのお清殿とやらではござんせぬ。年の頃は二十三四で色白にくっきりとした好い男は参りませなんだかえ」

「ヲゝ〳〵、来たげな〳〵。それはお姫様の恋男ぢゃげなの。三輪の里から跡追うて来たところを、何がお局達が引っ捕へ、有無を言はせず御寝所へ、ぐっと押し込み上から蒲団をかぶせかけ〳〵、アヽヽヽ宵の中内証の御祝言がある筈と、暮れぬ内から騒いでぢゃ。エヽけなり、こちとまで内太股がぶき〳〵と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の御用が急ぐに」

と喋り廻って、出でて行く

「サア〳〵〳〵ひょんなことが出来てきた。ほんにほんに油断も隙もなるこっちゃない。大それた人の男を盗みくさって、何ぢゃいしこらしい内祝言ぢゃ。余りな踏み付けやう。よい〳〵。その代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいんで退けるが腹いせぢゃ」

と行かんとせしが

「イヤ〳〵〳〵はしたない者ぢゃとひょっと愛想をつかされたら、と言うてこのまゝに見捨てゝこれがどう往なれう。エヽどうせうぞ」

と心も空、登る長廊下。行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら〳〵と、こゝかしこから寄りたかり

「ついし見馴れぬ女子ぢゃが、そなたはマア誰ぢゃ。何者ぢゃ」

「ハイ、ハイ〳〵、私は内方の、オヽそれよ、さっきのお清殿は寺友達、奉公に出られてから久しう逢はぬなつかしさ。ちょっと見舞ひに寄りましたら、これはマア〳〵よう来た。上がれ、茶々呑め、さうして煙草吞め、アノお上にはあた滅相な御祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢゃげな、ほんに内方の様なよい衆の御祝言はどの様なものぢゃおのれやれ拝んでなり、腹癒よと、うかうかこゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その聟様をちょっと拝まして貰うたら忝うござりまする」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶってやろ』と目引き、袖引き

「マア〳〵そちは仕合せな。かういう折に参り合ひ、お座敷拝むという事は、女の身では手柄者。したがこちらが呑み込んでお座敷へは出すものゝ何ぞさゝずばなるまいに、何と皆さん、いっそのことこの者に酌取らそではあるまいか」

「よからう〳〵」

「アヽ申し、その酌とやらは」

「ヲヽ何のまたそち達が知ってよいものか。今こゝで教へてやろ。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。あり合ひの婿君様には紅葉の局。梅の局は嫁君役。残りは介添え待ち女郎」

と桜の局が指図して、嫌がるお三輪に、長柄の銚子持たせ、持ち添へ

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。コレ立つのぢゃわいの〳〵。エヽ何ぢゃいの。うか〳〵せずとよう覚や。三度目ついで婿君へ。コレ酒がこぼれるわいのう。不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。これも嗜みなければならぬ。サアなと謡やいの」

「エヽ」

「エヽとは嫌か。そんなら婿様拝ます事はマアならぬ。サそれが嫌なら早う謡や」

とせつき立てられ

「これがマア何と千秋万歳の」

の玉の血の涙声詰らせて泣いじゃくり

「ヲヽめでたう哀れに出来ました。色直しにはんなりと、梅が枝でも蕗組でもサア〳〵聞きたい。所望ぢゃ〳〵」

「エヽあられもない事おっしゃりませ。山家育ちの薮鶯、ほう法華経も片言ばかり。上り下りの仇口や、の唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しなされ。早うその婿様に」

「サア聟様が見たくば早う謡や。馬子の唄なら面白からう。ついでに振りも立ってしや。嫌ならこっちもなりませぬ。帰りゃ〳〵」

と引き出され

「サア〳〵〳〵何の嫌と申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイ〳〵謡ひまする」

と泣く〳〵も、涙に絞る振り袖は、鞭よ、手綱よ、立ち上り

「竹にサ、雀はナ、品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ、色の道かいなアヽヨ、エヽこゝなほてつ腹め、とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆々一度に手を打って

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我々が、ほてつ腹までよれました。馬士殿大儀」

と言ひ捨てゝ行くを、驚き

「コレ申し、私も共に」

と取り縋れど、ふり離されてがばとこけ、寝ながら裾にしがみ付き、引きずられて、声を上げ

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござって下さりませ。お慈悲、〳〵」

と手を合はせ、拝み廻るを叩きのけ

「オヽしつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、叶はぬ事ぢゃ、置いてたも、大胆女の躾をせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐるやら。つめりつ、叩いつ、突倒し

「サア〳〵これで姫様の悋気の名代納った。いよいよめでたい御祝言、三国一ぢゃ。聟を取り済ました。しゃん〳〵、しゃんと済んだ」

と打ち笑ひ、局々ヘ入る跡は、前後正体泣き倒れ、暫し消え入り居たりしが

「エヽ胴慾ぢゃ〳〵胴慾ぢゃわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何と堪えて居られうぞ。思へば〳〵つれない男。憎いはこの家の女めに見かへられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き〳〵、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「エヽ妬ましや、腹立ちや、おのれおめ〳〵寝ささうか」

と姿心もあら〳〵しく駈け行く向ふに、以前の使者

「オヽそなたも邪魔しに出たのぢゃな，もうかうなったら誰が出ても構はぬ〳〵。そこ退きゃ」

と袖すり抜けてかき入る裾、しっかと踏まへ

「コリャ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しゃ〳〵」

と身をもがく。たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐっと差し通せば、『うん』とのっけに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなり。

**ひらかな　の段**

**〔解　説〕**

元文四年（一七三九）大坂竹本座初演。文耕堂・三好松洛ら五人の合作による五段の時代物浄瑠璃。外題の「盛衰記」は『源平盛衰記』を指し、源義仲が滅亡する粟津の戦いから一ノ谷合戦までの間の『平家物語』の世界を描いています。女流ではほとんど語られない演目で、昭和四十三年四月の本牧亭公演以来、五十五年ぶりの上演です。

**〔松右衛門内の段　あらすじ〕**

義仲の御台山吹御前と若君駒若丸は、老臣鎌田隼人とその娘腰元お筆に守られて落ち延びますが、大津の宿屋で追っ手がかかり、暗闇のなかで、同宿の船頭権四郎の孫槌松が駒若に間違えられて討たれ、山吹と隼人も死んでしまいます。権四郎の娘およしへ婿入りしていた船頭松右衛門とは、実は義仲の家臣である樋口次郎兼光で、舅が孫と取り違えて駒若を連れ帰ったことから、偶然にも若君を守ることになります。お筆が松右衛門宅を訪れ、孫の死を知った権四郎は悲憤しますが、樋口の真情込めた説得で納得します。

光を添へぬらん

妻恋ふ鹿の果てならで、難儀硯の海山と、苦労する墨憂きことを数書くお筆が身の行方、いつまではてし難波潟。福島に来てこと問へば、門に印のそんじょそこと、松を目当てに尋ね寄り

「ハア御免なりましょ。松右衛門様はこなたか。お名を知るべにはる〴〵尋ね参った者。お逢ひなされて下さったら、忝うござんしょ」

と物腰のしとやかさ

「アレ父様。松右衛門殿に逢ひたいと女子が来た。碌なことではあるまい」

と跡先知らで女気の、はや悋気する詞の端

「エヽ興がる、嗜め〳〵〳〵。松右衛門に逢ふて姉ぢゃといふても悋気するか。それほど気遣ひなら呼び込んで、逢はせぬ先に聞いたがよいわい。アヽどなたじゃ、女中、どこからござった。松右衛門うちに居まする、遠慮せずととっとゝ入らしゃれ」

「それはまあ〳〵お嬉しや」

と笠解き捨てゝうちに入り

「お前が松右衛門様か、お近付きでなければお顔見知らうやうはなけれども」

「なけれどもなりゃ、なぜござった」

「ム、サアもうし、なにが知るべにならうやら。摂州福島松右衛門子、槌松と書いたが縁になって」

「ヤアそんならこなたは大津の八丁で、また後の月二十八日の夜の」

「アイお子様を取違へた者でござんす」

「道理で見たような顔ぢゃと思ふたこと。これは夢か現かいゝナウ。およし悦べ、を取違ヘた人ぢゃとやい。此方からも行方を尋ねて、もと〳〵へ取戻す筈なれども、なにを証拠に尋ねて行かう手掛りもなく、泣いてばっかり居りました。その代りには取違へたそっちの子供衆。の毛で突いたほども怪我させず、虫腹一度痛ませず、マヽ娘が乳が沢山なゆゑ、喰物はあしらひばかりマ乳一度あまさせず、ヲヽそれよ。風邪一度ひかさばこそ。親子が大事にかけたにつけても、此方の息子めもさぞ御厄介。お世話であらう。よう連れて来て下さった。忝い、ハヽヽヽヽ、忝い、ハヽヽヽ。忝い〳〵マ忝いわいやいハヽヽヽ。わるさよ。わがうちを忘れたかい。なぜ入らぬぞ」

「アヽイヤ門に、ではござんせぬ」

「エヽヽヽヽ、連れの衆が後から連れてお出でなさるゝか。さぞ御厄介。忝いハヽヽヽ忝い、ハヽヽヽヽヽ忝い〳〵マ忝いわいやいハヽヽヽ。ハテはやう逢ひたいな。娘チャットお礼を申しゃいの」

「アモ父様せはしない。このお礼がちゃっきりちゃっとつひいふて済むことかいなア。もうしこの槌松はなぜ遅い。お連れの衆が門違へはなされぬか」

「この槌松はなぜ遅い」

「マわが子はいかに」

「孫はいかに」

と立ち代り入り代り、門を覗いつ礼いひつ。そゞろに悦ぶ親子の風情。お筆が胸に焼金さす、今さらなんと返答も、泣くも泣かれず差俯き暫く詞もなかりしが

「お願ひもうさねば叶はぬ訳あって、恥を包み面目を凌いで尋ね参りしが、さうお悦びなされては、気がおくれて物がもうされぬ。マア下にゐて下さんせ」

と涙ながらに押鎮め

「改めて申すもあぢきなきその夜の騒ぎ。手ばしかう逃げ隠れなされたお前方は巡礼の功徳。此方は一人は病人なり、男とてはあるに甲斐なき年寄。逃ぐるも隠れるも心に任せず。取違へたそのお子はその夜にあへなくなり給ふ」

と聞いてびっくり

「とは何故に」

「とはいかに」

とあまりのことに泣きもせず、仰天するこそ道理なれ。

は声こそ立てねども、涙を老に噛みまぜて、のどにつまればむせ返り、身も浮くやうに泣きければ、娘は心も乱るゝばかり、空しき笈摺手に取って

「やれ槌松よ、かゝなるは。夕べの夢にまざ〳〵と、前の父さんに抱かれて天王寺参りしやると見たは、日こそ多けれ父御の三年の祥月なり。命日のけふの日に便り聞く告げでこそありつらん。それとは知らぬ凡夫の浅ましさ。今日は連れて来るか明日は戻りゃるかと待ってばかりゐたものを、大きな災難に逢ふて笈摺に書いた詮もない、これがなんの二世安楽。巡礼も当てにはならぬ、観音様も腑甲斐ない。恨めしや懐かしや、あわれこのことが夢であってくれかし」

と顔に当て抱き締めて声をはかりに、身悶えし前後不覚に泣きゐたる

「娘ほへまい。泣けば槌松が戻るか。世迷言いやふたゝび坊主めに逢はれるか。かねて愚痴なと祖父が叱るをどう聞いて」

といふ詞に縋りつき

「ヲヽそれ〳〵かう申すわたしも女子ぢゃが愚痴では済まぬ。祖父様の仰るとほり、いかほどお歎きなされたとて、槌松様のお帰りなされるといふではなし。ふたゝび逢はれるといふではなし。サさっぱりと思召し諦めて、此方の若君をお戻しなさって下さったら、アヽありがたい忝いと悦ぶわたしが心がどこへ行かう。槌松様の未来のためには仏千体寺千軒、千部万部の経陀羅尼、千僧万僧の供養なされたより」

「女子黙れ。何の面の皮でがや〳〵〳〵〳〵たゝく。コ、コヽこの襖を見をれ。かはいや槌松が、下向に買ふといふたを聞き分けず、無理に買ふて三井寺三界。持って歩いて嬉しがった、鬼の念仏に餓鬼、外法殿のあたまへ梯子さいて月代剃る大津絵。藤の花のお山も買ひをらず、外法殿の絵を買ふたは、あのやうに髭の白髪になるまで、長生しをる瑞相。鬼のやうに達者で金持って、世界の人を餓鬼のやうに這ひかゞましをらう。吉相ぢゃ、アヽ目出度い〳〵。戻りをって見をったら、さぞ悦ばうと貼って置いて待ったに、思へば梯子は外法あたまの下り坂。鬼の傍に這ひつくばふ、餓鬼になってお念仏で助かるやうになりをったか。チエヽ、思へば思ひ廻すほど、身も世もあられぬ、よう大それた目に逢はせたなあ。それになんぢゃ。思ひ諦めて若君を戻して下され。エヽ、町人でこそあれ孫が敵。首にして戻さうぞ」

と突立上る

「ノウ悲しや」

と取りつくお筆を押し退けはね退け納戸の障子、さっと明くればコハいかに、松右衛門、若君を小脇にかい込み、刀ぼっ込み力士立ち。お筆驚き

「ヤアこな様は、あの樋口の」

「アヽコリャ〳〵女。ムウム聞えた。最前帰りがけ下の樋の口で、ちらと見た女中よな。若君は身が手に入って気遣ひなし。いふてよければ身が名乗る。ナア合点か。かならず樋の口を樋口などと麁相いふまいぞ」

と目まぜで知らせば打ちうなづき鎮まる女、聞かぬ祖父

「松右衛門出来したな。さっきにからのもやくや、寝られはせまい聞いたであらう。そちがためにも子の敵。そのづだ〳〵に切刻んで女子に渡せ」

「イヤさうはいたすまい」

「なぜいたすまい」

「サアそれは」

「それはとは松右衛門、エヽ水臭い〳〵〳〵、水臭いわいやい。云はいでも知れた。おのれが胤分けぬ槌松が敵ぢゃによっていたさぬな。その根性では祖父が儘にもさしゃせまい。もう破れかぶれぢゃ。おれがいふやうにせぬからは親でも子でも何でもない。娘そこら駆け廻って若い者大勢呼んで来い」

と気を急いたり

「やれ待て女房、人を集むるまでもなし。親父様スリャどうあっても槌松が敵、この子を存分になさるゝか」

「くどい、〳〵わい」

「ハアヽぜひもなし。この上はわが名も語り仔細を明した上のこと」

と、若君をお筆に抱かせ上座に直し

「権四郎、頭が高い。天地に轟くの如く、御姿は見ずとも、定めて音にも聞きつらん。これこそ朝日将軍義仲公の御公達駒若君、かく申す我は樋口次郎兼光よ」

といふに親子は荒肝とられ、呆れ果てたるばかりなり。樋口、お筆に打向い

「さて〳〵女のかい〳〵しく、後々までも御先途を見届くる神妙さ、山吹御前も思ひよらぬ御最期。御身が父の隼人もあへなく討死したりとな。力落し思ひやる。それにつけてもかくてある樋口が身の上さぞ不審。若君のためにはながら、多田蔵人行家という無道人を誅伐せよとの御意を受け、河内の国へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け粟津の一戦。ハヽア誤りなき御身をやみ〳〵と御生害遂げ給ひし、わが君の御最期の欝憤、直ぐに駈け入り、一軍とは存ぜしかど、思へば重き主君の仇。をもって範頼義経を討取り、亡君に手向け奉らんと、サこの家に入聟し、逆櫓をいひ立て早や梶原に近付き、義経が乗船の船頭は松右衛門とこと極まる。追付け本意を遂ぐるようになるにつけ、この若君の御在所はいづく、いかゞならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語り障子越しに聞くにつけ、見れば見るほど面やつれ給へども、紛ひもなき駒若君。ハヽさては思ひ設けず願はずして、ところこそあれ日こそあれ、その夜一所に泊り合はせ、取換へられて助かり給ふ若君は御運強く、殺されし槌松は樋口が仮の子と呼ばれ、御身代りに立ったるは二心なき某が忠臣の存念。ハヽア天のに相叶ひ、血を分けぬ子が我が子となって、忠義を立てしその嬉しさ、なにに類のあるべきぞ、御立腹の数々御歎きの段々。申し上げう様はなけれども、親となり子となり夫婦となるその縁に、つながるゝ定まりごとと思召し諦めて、若君の御先途を見届け、まだこの上に私が武士道を立てさせて下さらば、の御厚恩。コレ〳〵〳〵聞き分けてたべ親父様」

と身をへりくだり詞を崇め、忠義に凝ったる樋口が風情。兼平巴がをふまへ木曽に仕へし四天王、その随一の武士と世に名を取りしも理なり。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

(一般社団法人　義太夫協会発行)